

No.
114

2004年10月29日 発行

KYOTO UNIVERSITY
OF
EDUCATION

KYOKYO

特 集

地域と共に10年目を迎える
「ふれあい伏見フェスタ」

— 学生プロデュースによる
実地教育の一環として —

影 窳 士 風 流 水 石 間 林
湊 光 静 自 如
蘇軾張栻之言
千晶書



京都教育大学

表紙「掛軸制作を通しての書道芸術」

附属高等学校 3年

中園 千晶



私がこの掛軸を制作したのは二年生の時です。書道教室にあった本から蘇軾と張栻の格言を選び、隷書で書きました。なぜこの二人の佳句を選んだかという言葉の意味よりも文字を見て決めました。初めの七文字が蘇軾の句、後の七文字が張栻の句なのですが、私はその中でも「風」と「影」の二文字が気に入ったので、この二人の句に決めました。隷書は授業で習った書体のうちで最も私のスタイルに合っていた書体です。力強さや勢いのはっきりと分かる書体は、私にぴったりでした。

掛軸のように大きな作品を作るのは初めてだったので、大変苦労しました。見ての通り半紙に書いてあるものとは文字数も文字の大きさも違っており、非常に根気のいる作業でした。一枚の作品を書くのに三十分はかけないと書けませんでした。落款だけでも何十回も練習しました。文字のバランスや配置も難しく、先生の協力を得ながらなんとか書きあげました。

出来上がった作品にはとても満足しています。特に気に入っていた「風」と「影」、さらに「水」や「溪」という字も大変うまくできたと思います。私の書のスタイルである力強さと勢いも十分に出ており、とても好きな作品に仕上がりました。一つ一つの文字のイメージを大切にしていきながら、全体としての力強さと勢いを失わずに書ききることはなかなか難しかったのですが、予想以上によい作品ができたのでとてもよかったです。

中国を代表する二人の有名な人物の名を書くには多少気が引けましたが、落款も一文字一文字を丁寧に書けたと思います。

私は小学校の六年間習字を習っていたのですが、高校へ入ってから書を芸術としてとらえ、うちわや表札作り、掛軸制作を行ってきました。ただ手本を見て書くのではなく、自分独自の作品を作れることがとても楽しかったです。書く対象から書体などに至るまで、書を芸術としてとらえることの難しさやおもしろさを体験できてとてもよかったです。この掛軸制作は、まさに私自身を表す作品として文句なしの一点なのです。

< 作品解説 >

前半7字 「蘇軾(そしょく)」 北宋

『処士風流水石間』(しょしのふうりゅうすいせきのあいだ)

無官の人士の境遇は風流で水流れ石ある山の清き処に住むのである。

後半7字 「張栻(ちようしょく)」 南宋

『林影溪光静自如』(りんえいけいこうせいにしてじじょ)

林の影に谷の色、静かで平靜でよい。



(財)大学基準協会
認定マーク

このマークは、大学基準協会の定める大学基準に適合した大学が使用できるマークです。

CONTENTS

表紙 附属高等学校3年 中園 千晶

特集

地域と共に10年目を迎える「ふれあい伏見フェスタ」 学生プロデュースによる実地教育の一環として			2
ふれあい伏見フェスタ実行委員会			

留学生の声

日本について	教員研修留学生	スリ アユ インドロワティ SRI AJU INDROWATY	8
--------	---------	------------------------------------	---

研究余滴

小下絵は画家の設計図	美術科教授	脇坂 淳	10
------------	-------	------	----

京教今昔物語

個性豊かな先輩の先生方に学びました	附属桃山小学校教諭	浜崎 順子	12
-------------------	-----------	-------	----

海外見聞録

待つのが得意なイギリス人	教育学科教授	村上 登司文	14
--------------	--------	--------	----

京教学内探訪

Meet the World	附属教育実践総合センター	大森 美香	16
----------------	--------------	-------	----

附属学校園だより

自然って不思議！			
- コンテナピオトープの取り組み -	附属桃山小学校副校長	川端 建治	18
久美浜小天橋最後の臨海学舎	附属京都小学校副校長	多田 光利	19
3回目の「湖畔学習」と最後の「修学旅行」	附属桃山中学校副校長	多羅間 拓也	20
京都府合唱コンクールで金賞	附属京都中学校副校長	橋本 雅子	21
サマープログラム	附属幼稚園副園長	川端 智江	22
マレーシア研修旅行	附属高等学校副校長	斉藤 正治	23
大学・美術科との合同プロジェクト『野焼き』	附属養護学校副校長	小竹 健一	25

非常勤講師から

和楽器に触れて	音楽科非常勤講師	林 美恵子	26
教育実践基礎演習を担当して思うこと	附属教育実践総合センター非常勤講師	神月 紀輔	26

原稿募集・編集後記

地域連携・広報委員長	小寺 正一	27
------------	-------	----

特集

地域と共に10年目を迎える「ふれあい伏見フェスタ」 - 学生プロデュースによる 実地教育の一環として -

ふれあい伏見フェスタ実行委員会

はじめに

平成8年にスタートした「ふれあい伏見フェスタ」は名称、内容等のさまざまな変遷を伴い、本年4月には9回を重ねることになりました。平成17年には第10回の記念すべき年を迎えることになり、これを機に「ふれあい伏見フェスタ」をふりかえり今後の新たな指針としたいと思います。第1回から5回までの様子は、すでに本広報誌105号に記載されていますので、参照してください。

「ふれあい伏見フェスタ」の取組について

この取組は当初、地域住民に対するサービスが主な目的でしたが、本学が教育の場であることから、この取組を学生の学修の機会としてとらえる意識が高まり、平成15年には、「学生の地域貢献に関する意識と能力を向上させる」ことを目的の一部としました。学生スタッフを増やすと同時に規模の拡大と内容の多様化を図り、学内のイベント公募を促した結果、多くのイベントが実施されることになりました(表1)。また、同年からは、京都教育大学オープンカレッジ「ふれあい伏見フェスタ」と改称し、質的量的にも全学的取組をアピールして、その位置づけをさらに明確にしました。学内の多くの教

職員の協力を得ながら、企画段階から学生を中心とした、いわば「学生プロデュース」による実地教育的な内容として定着してきたといえます。

また、広報活動も回を重ねる毎に充実をはかってきました。地域に根ざした大学として、広報活動は大きな意味をもっています。第4回および9回の広報にもちいたポスターを図1に示します。本学の事務職員によりデザインされたものです。第8回からはポスターだけでなくイベントの開催を知らせるチラシを近隣の小中学校および一般家庭にも積極的に配布いたしました。昨年からは近隣の小中学校だけでなく公共施設、金融機関等に5万枚以上を配布しました。われわれの熱意が伝わったのか、昨年は約1200人も多くの参加者を迎えることになりました。表2に示すように、天候に左右されるため、参加人数は年により変動していますが、イベントの規模的拡大と共に、参加者数も着実に伸び、地域の人達にとって4月の花見頃の恒例行事となっています。教員有志による「手づくり」の行事としてスタートした催しが、学生、教職員が一丸となり、そして地域住民の支援の下、少しずつ成長してきたといえます。

「ふれあい伏見フェスタ」のもう一つの特徴として、

地域からの参加者に対して、本学関係教員が伏見の歴史・文化・自然についての公開講演を行い、さらに、その講演内容に関連する史跡等を案内するという企画も継続して行われてきました。これは「ふれあい伏見フェスタ」が当初から「地域住民に伏見に関する学習の機会を提供することで、大学と地域の良好な共生関係を構築する」ことも

(表1)「ふれあい伏見フェスタ」実施状況

	開催年月日	イベント数 (件)	学外参加者数 (人)	学内スタッフ人数	
				学生(人)	教職員(人)
第1回	平成8年4月7日	4		データなし	
第2回	平成9年4月5日(雨天)	7		データなし	
第3回	平成10年4月12日	10	約200	41	21
第4回	平成11年4月4日	11	約180	45	20
第5回	平成12年4月2日	12	202	58	22
第6回	平成13年4月8日	9	約150	49	25
第7回	平成14年4月7日(雨天)	10	55	48	30
第8回	平成15年4月6日	26	約1200	160	53
第9回	平成16年4月4日(雨天)	28	約600	237	52

目的としていたからです。本年度は、「解体新書のふしぎ」と題する公開講演会もおこなわれました。これは、昨年、附属図書館で発見され初版本の可能性が高い「解体新書」(安永3(1774)年の刊行とされる本文4巻、解体図1巻の全巻)を紹介したものです。実物も展示され、多くの参加者の興味を引きました。詳しくは、本広報誌113号をご覧ください。



(図1) 第4回(平成11年)および第9回(平成16年)の広報用ポスター(いずれも清水禮子によるデザイン)

また本学キャンパスは災害発生時における広域緊急避難所になっており、地域住民がグラウンドや体育館、その他の建物やオープンスペースの位置等を確認する良い機会ともなっています。

新たな学生教育の場を提供

本学は学校教員、特に小中学校の教員養成を主目的とする大学ですが、教科指導に重点化された画一的な教員養成ではなく、「地域における教育の総合大学」をキーワードに、実践力に優れる教員の養成を目指しています。教師には児童生徒の学習指導能力だけでなく、児童生徒の課外活動や保護者及び地域住民を対象とする様々な活動の企画・運営を担う能力が求められています。これらの能力の育成を正規のカリキュラムの他にも、本学では多様な実地教育活動と地域連携活動を通して、その育成に努めています。

カリキュラム外の実地教育活動として、地域との交流・連携活動を体験する目的で実施されるのが「ふれあい伏見フェスタ」です。この取組の開催に向けて、企画や打ち合わせは前年の10月頃に始まり、反省会も含めると約半年間に渡って準備を行っています。また、芸術関係の作品や演奏ロボットの製作には、さらなる準備期間が必要となっています。地域住民が参加する行事の運営に対する責任感を、長い時間をかけて醸成していることとなります。

取組の特色について

本学のキャンパスがある京都市伏見区は、古くから歴史の中心舞台であったために多くの歴史的遺産が分布しており、また文化的施設や興味深い自然環境にも恵まれていますので、地域の方々の生涯学習の題材には事を欠きません。また、「ふれあい伏見フェスタ」では子供を対象とするイベントが多いのですが、本学が小学校と中学校の教員養成を主目的とする大学としての特徴をあらわしています。

本学の教員養成大学としての特徴である広い範囲に跨る教員の専門分野を生かして、この取組を全学的に実施する体制をとっています。この取組の開催費用は基本的には本学の教育・研究振興基金(本学開設120周年記念事業を通して集められた寄付金)で賄われていますが、地域の各種団体や大学生協・同窓会からの寄付金等の支援もあり、地域からの理解も受けながら実施されています。

近年、学校・大学には地域交流・連携活動を推進するだけでなく、教育の中に地域特性を活かすことも求められるようになってきました。「ふれあい伏見フェスタ」は、これまで回を重ねる度に問題点を改善し、学生が地域との関わりを強く意識し、それ

(表2)「第9回ふれあい伏見フェスタ」のイベント

分野	イベント名称
人文学	花らんまんキャンパス句会
	英語で遊ぼう
自然科学	学内ネイチャーウォッチング
	ふれあい理科教室(ふれあいサイエンス)
	ハツカネズミと遊ぼう
健康関係	心と身体健康チェック
	健康・体力づくりとウォーキング
	中高年対象の簡単な体力測定
	フィットネスABC
芸術関係	和太鼓演奏・体験
	書に親しむ
	歌ってみよう第九のツボ
	アジアの音色を味わおう
	ゴリゴリ自家製絵の具で京教の桜を描こう
ものづくり体験	小鳥の巣箱作り
	土ひねり
	ものづくり教室
	Wood Work C
	ブーメラン・ヘリコプターの製作
	歩け、かたつむりロボット
作品展	野外彫刻展
	祇園囃子演奏ロボットの展示
	カナディアン・カヌーを作りました
	和傘の展示
	幡の製作・展示
その他	附属図書館の1日
	京教大タウンミーティング
	インターネット体験
	わくわくこどもまつり
	車椅子体験
	子供広場
	学内ハイクとりサイクル市
	実体視にチャレンジ
	フリーマーケット
	地震体験コーナ
	野点と和傘の展示
	焼きジャガイモ
	留学生による郷土料理
	関西が生んだ食文化「たこやき」

に積極的に取り組むことができる環境を整えてきました。将来、学生は学校教員として地域と深く係わることとなりますが、その意識と能力を高めるための絶好の機会となっています。

そもそも、教員養成系の大学に入学してくる学生は、子供の遊びや学習、あるいは地域住民の生涯学習にかかわる取組への参加を好む傾向にあります。しかし、学生だけの組織では、資金・情報・経験・労力等の制約のために、大人数の住民の方々を集めること、そしてそれに対応することは困難な状況にあります。この取組は、教職員のサポートによる学生プロデュースの環境を提供しているといえます。

表1に示したように、年々イベント数・参加者数・学生スタッフ数・教職員スタッフ数のすべてが増加傾向にあり、特に「学生プロデュース」を基本とした第8回からは、規模が飛躍的に拡大しています。地域住民や教職員のみならず、学生にもこの取組が浸透してきた結果であると考えられます。なお、参加者の居住地も大学近隣や伏見区内のみならず、京都市内・京都府内・他府県と拡大傾向にあります。

イベントの紹介

「ふれあい伏見フェスタ」で実施されるイベント数は徐々に増加し、本年の第9回ではその数が28にも達しました(表1)。イベント内容は、表2に示すように学術的なもの、体力測定、心の診断、作品展、ものづくり体験、実技体験、散策などから、アトラクショナルなものや食物提供まで多様です。また、イベントの担当も、教員と学生、教職員のみ、学生のみ、学外者も含む場合と様々ですが、多くは教員と学生が合同で実施しています。また、学内の大学生協と共に、昨年からは大学食堂の開放を行い参加者に利用していただいています。

次にいくつかの代表的なイベントについて紹介いたします。

「公開講演会」と「ウォーク」

次頁の表3は「公開講演会」の題目を示しています。このイベントは、前述のように、本学関係教員が伏見に因むテーマを取り上げて講演を行い(午前中:90分程度)、午後には、講演内容に対応して伏見を案内して回る(ウォーク)というものです(3~4時間程度)。

「ウォーク」においては、学生は準備から実施を

(表3)「ふれあい伏見フェスタ」の公開講演会題目

	講演題目
第1回	伏見の地質めぐり(ウォークを含む)
第2回	古代の伏見(ウォークを含む)
第3回	漱石の道(ウォークを含む)
第4回	中世の伏見(ウォークを含む)
第5回	伏見の狛犬を楽しむ(ウォークを含む)
第6回	坂本竜馬の恋(ウォークを含む)
第7回	深草丘陵の昔と今(ウォークを含む)
第8回	ウォーキングにおける遊びのすすめ
第9回	解体新書のふしぎ(特別展を含む)

通して、担当教員の指導の下で、「地域住民のための地域を題材にした講演と地域の案内」の運営方法を体得します。準備段階としては、参加者に配布するレジメの作成、案内ルートの下見と地図の作成、特に、年配者や子供連れの参加者に配慮したルート作りや、ルート上におけるトイレの位置の確認と安全管理の重要性などを学んでいきます。また、実施の際には、会場の設営と講演会の運営に、また、案内では参加者の誘導や交通安全の確保などに携わります。参加者は数十名にもなりますので、引率教員の説明が十分に行き渡らないことも多く、学生が説明役に回る必要があり、そのための事前学習も重要となっています。

「ふれあい理科教室」

このイベントは教員と学生との合同企画で、教員の専門によっていくつかの内容があります。まず、参加者が望遠鏡を作り、さらにその望遠鏡や大学の望遠鏡で昼間の金星観測を行う「未知の空への小さな冒険」があります。天文学を専門とする教員と天文学同好会の学生が、望遠鏡の製作とその操作法を参加者に説明・指導し、さらには天体の解説を行います。親子づれの参加者に人気のあるコーナーです。

化学・物理を専門とする教員と学生は「サイエンスマジック」と「巨大シャボン玉」、および「センサーづくり」を実施しています。「巨大シャボン玉」は、特に小学校低学年の子ども達に人気があり、1日中、歓声が聞こえる程です(図2)。また地学の教員と学生は「化石のセッコウ模型に挑戦」を実施しています。これらのコーナーでは、地域からの参加者への対応は学生が主体となって行います。実

演や参加者の体験補助のみならず、現象や原理の説明、地質時代に生きた生物の説明をすることも学生の役割なので、学生にとっては事前学習と準備が重要となります。これらも親子づれの参加者に人気のあるコーナーとなっています。



(図2)「巨大シャボン玉」

「地震体験」

地元の伏見消防署の協力により起震車を用いて震度の大きさによる揺れの違いを体験できます。地震発生時の対応などについても体験を交えての説明が受けられます。前述のように本学が広域災害非難地域に指定されていることもあり、地域連携の視点からも意義のあるイベントとなっています(図3)。



(図3)「地震体験」

「キャンパスネイチャーウォッチング」

本学は恵まれた自然環境を有しています。平成13年からは大学構内をひとつの野外博物館とする「オープン・エア・ミュージアム」構想を立て、豊かな自然を学生の教育に利用するとともに、市民にも開放しています。教員と共に学内を散策しながら、動植物等の話を聞き環境について考える機会となっています(図4)。



(図4)「キャンパスネイチャーウォッチング」

「留学生による郷土料理」

本学の留学生は毎年、微増の傾向にあり、また出身国も様々です。インド、中国、韓国、タイからの留学生による手づくりで、一味違う郷土料理を提供しています。地域の人達との交流は留学生プログラムでも位置づけられており、有意義な接触の場となっています(図5)。



(図5)「留学生による郷土料理」

「フリーマーケット」

近隣の方々および教職員が出店し、大変な賑わいをみせています。今年は10店舗を数えました。これからも近隣の方々の出店が増えるよう、いろいろと工夫を重ねていく予定です(図6)。



(図6)「フリーマーケット」

「ハツカネズミと遊ぼう」

実験用のマウスと触れ合い、動物に親しんでもらう内容です。はじめてマウスをさわる子ども達、またネズミが泳ぐことを知った子ども達からの歓声が絶えない人気のコーナーで、300名をこえる来場者がありました。

「野外彫刻展」

このイベントは公開講演会とともに第1回から実施されています。美術科の彫塑を専攻とする学生の作品をキャンパス内に展示し、地域住民に観賞していただく取組です。フェスタ当日をはさんで2週間の展示期間をとっており、例年、20ほどの作品が展示されます。教員と学生が、それぞれの作品の制作活動から展示場所の選定までを協力して行っています。

「心と身体の健康チェック」

このイベントは、医師免許を持つ教員、臨床心理士資格を有する心理学専門の教員および食物学専攻の教員が、関係する専攻の学生・院生とともに合同で実施する企画です。地域住民の参加者を対象に、骨密度・体脂肪・内臓脂肪・動脈硬化の程度・血圧等の測定、心理テスト、食事内容のチェックを行い、それらのデータに基づき、望ましい食生活の相談や心理テストに出る行動パターンやストレスについての相談を受けます。心理カウンセリングはプライベートや微妙な問題をも含むために高度な専門性を必要とし、またこのコーナーには中高年の参加者が多いので、心理学専門の教員が大学院生と共に周回準備を行っています。これに類似するイベントに「健康・体力づくりとウォーキング」「中高年対象の簡単な体力測定」があります(図7)。



(図7)「心と身体の健康チェック」

地元の報道機関により紹介される

京都新聞平成16年4月5日に「ふれあい伏見フェスタ」の内容が報道されイベントの一部も紹介されました(図8)。また地元のケーブルテレビ「みやびジョン」でも約10分間、参加者、スタッフへのインタビューも交えた内容が報道されました。図9はイベントの運営を行う学生の様子が放映されたものです。いずれも、この行事の趣旨をわかりやすく伝える報道内容となっており、われわれスタッフ側にとっても大変参考になる学外者からの視点でもありました。

将来展望について

この「ふれあい伏見フェスタ」の各イベントは、当初は教職員により企画・実施されました。しかし、教職員の間にも、この取組は「学生の実地教育活動の一環でもある」という見方が広まってきまし

た。また、回を重ねるにしたがって、ゼミやサークルで受け継がれる企画も増え、さらに準備から実施までを学生自身で実行するイベントも現れ、いわば学生プロデュースによる新たな展開が生まれるようになりました。今後、ますますその傾向が高まると予想され、この取組は地域の人達に大学キャンパスにきていただく絶好の機会であるだけでなく、本学の実地教育活動の特徴のひとつになると期待されています。

また同時に、地域に根ざした行事としてさらに発展させることも重要であり、そのためにも地域の方々が大学に何を求めているのかについて耳を傾ける必要があると考えています。元気に活躍する学生の姿を通して、地域との連携を实のあるものへ発展させることを、地域に存在する大学としての責務と考えています。



(図8) 新聞報道されたフェスタの様子



(図9) 地元ケーブルテレビで紹介される

日本について

教員研修留学生

スリ アユ インドロワティ
SRI AJU INDROWATY

私が日本へ来たのは去年の十月でした。関西空港から飛行機を降りてすぐバスに乗り換えて京都へやってきました。初めて京都の道路を見て、すごくきれいで整然としていると思いました。外国へ来たのはそれが初めてだったので、そのときのことはまだはっきりと覚えています。

十月になると紅葉が始まって景色も変わります。そんな時はよく「四季の歌」を思い出します。日本は四季があるという点で、とてもいい国だと思います。私の故郷インドネシアには雨季と乾季という二つの季節しかなく、気温も25度から29度と一年中ほとんど変わることはありません。

十二月になると、温度も下がります。その時期は、私にとって一番恐ろしい時期でもあります。気温の低下に私の鼻は敏感で、呼吸をするといつも鼻水が出てきました。ハンカチで何度も鼻をかむうちに、鼻の周りをけがしてしまうこともありました。なので、どこでに行くときもマスクをつけて出掛けていました。そんなとき私は、早く春になったらいいなあと思いました。でもやっとやってきた春が過ぎていくのはとても速かったのを覚えています。桜

の花も二週間しか咲きませんでした。このことについては少し残念だと思いました。

夏になると気候はインドネシアのそれと似たものとなりました。ただ気温が34度まで上がったことには驚きました。それに加え、風がほとんど吹かず、私の体を疲れさせました。二週間程食欲がなくなってしまったこともありました。私の出身の町では「スラバヤ」と言って、人々に「一番暑い町」と呼ばれています。暑いといってもまだ風が吹いていて心地よいです。そして夜と昼の温度は異なり、夜は温度が下がります。よって寝る時はエアコンがなくても大丈夫です。それに比べて京都は山々に囲まれているので昼と夜の温度にあまり差がなく、風もあまり吹きません。

私は一年間日本にいますが、これはつまり私がもう既に日本の持つすべての四季を体験したということの意味します。日本での滞在も残すところ六ヶ月ほどです。しかし六ヶ月に何が起こるか私はまだ知りません。まさに神のみぞ知るといった感じです。

時間があるとき、私はテレビ番組見たり、または漫画を読んだりしています。私は小さいころから読書の趣味を持っています。期末試験が終わったときなどは、たくさんの漫画を読んでいました。



漫画を出版するのはだいたい日本です。だから一年半前、私は十人のインドネシア人の中から日本へ留学生として選ばれたときはとても喜びました。日本は漫画とアニメに関してとても有名な国です。もしインドネシアにいたらインドネシア語に翻訳した漫画しか読むことができませんが、日本にいと直接日本語の漫画を読むことができます。私の専門は日本語で本当に間違いないと思います。テレビ番組を見たり、また漫画を読んだりすることでも勉強することができるからです。

これからも私は両親と家族、そして日ごろから私をご教授くださっている先生方に感謝し続けます。周りの人々の助けがあったからこそ、今の私の人生が成り立っているからです。



小下絵は画家の設計図

美術科教授 脇坂 淳

絵画表現の画面形式はいろいろあるが、なかでも襖や壁に貼付けられたものを障壁画といい、横へ横へと展開して長大さを示す。例えば10畳間の四方を巡る壁面は、広がりがおよそ16メートルにもなる。こうした部屋が幾間も連なるのが書院建築の特色である。

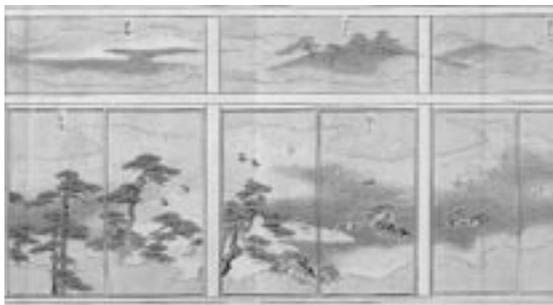
各部屋に絵が描かれ、その障壁画があたかも主役の座を占めるようになってから、かれこれ500年近くになろう。狩野永徳が大徳寺聚光院の襖絵を描いてからでも438年が経過している。その聚光院の伊東別院に近年、ニューヨーク在住の日本画家千住博氏が筆を揮った。滝、雲竜、水の森、砂漠、波をテーマに合わせて77面を描く。完成までに6年を要した。制作時間を単純に均質化できないのは無論のことであるが、およそ1ヶ月に1面あての割になる。

画家が作品を完成させていく過程、とりわけ日本画の場合、まずは絵様を構想しながら粗略な草稿、素下絵が作られる。構想が固まれば完成画の大要を具体化するために構図をまとめ、細部の描写もできるだけ整え、さらに彩色を施す。これが小下絵である。次に本紙（完成画）と同じ大きさに拡大された大下絵が準備される。大下絵に本紙（絵絹や紙）を当てて透写す。あるいは本紙が厚手で透写しが不可能な時は、木炭粉やベンガラ、代赭などの顔料を全面に付着させた念紙を大下絵と本紙の間に挟み入れ、上部の大下絵の線をなぞって写し取る。そして写し取られた絵様にしたがって本画を仕上げていく。これが古来の制作法である。

レディメイドの作はともかく、注文を受けての作となると施主の意向を尊重しなければならない。施主はあるイメージを描いているものの具体的な形にできないでいよう。それを具現化するのが画家の役目である。そこで画家の個性や特性が生かされつつ施主の意向にそのような作品が生まれれば両者の関係はまことに都合がよい。そのためにも小下絵の果

たす役目は大きく、もちろん画家の手控えとして重要な意味をもつが、施主の意向を問うのに適してもいる。

障壁画のような大画制作に際して、施主が絵様を知るのに素下絵では構図は知り得ても完成画の雰囲気はくみ取りにくい。大下絵は大きすぎて並べるとに場所ばかりとる。加えて修正するのもたいそうなことになる。その点、巻物の形態に仕立てられた小下絵ならば持ち運びも安易で、絵様の全貌も一目で掴みやすい。施主はできあがった小下絵を見て何らかの注文をつけたりする。これを画家側からの呼称として（御）伺下絵といっている。



松の廊下（部分、『江戸城障壁画の下絵』より）

伺下絵の慣わしはいつごろまで健在だったのだろうか。画家の社会的地位が近代にいたって向上するにしたがい、次第にお任せの気運が支配的となっていくたものと思われる。多少は施主の希望が入れられても、画家の創造性や個性を尊重する時世である。聚光院の伊東別院画の場合も筆者の現地口リセッション認識、あるいは住職との対話などを通して構想が練られていったのであろうが、千住博氏が伺下絵を作ったとは思えない。

江戸末期の嘉永7年（1854）4月に京都御所が炎上。それから1年半後の安政2年（1855）11月に再建があった。1年半ほどで竣工というその早さには驚かされるばかりである。中に立て巡らされる建具類、すなわち障壁画は土佐、京狩野、鶴沢、

円山、原、岸派の面々に新進の画家たちが加わり、もっぱら京都在住の画家たちによって整えられていった。いま目にできる障壁画のほとんどはその時のものである。ただ小御所は昭和29年（1951）夏に鴨川からの打ち上げ花火が原因で焼失。現在の建物は昭和33年に建てられた。それから半世紀近く経つと周りの幕末期の建物にすっかりとけ込んでいる。

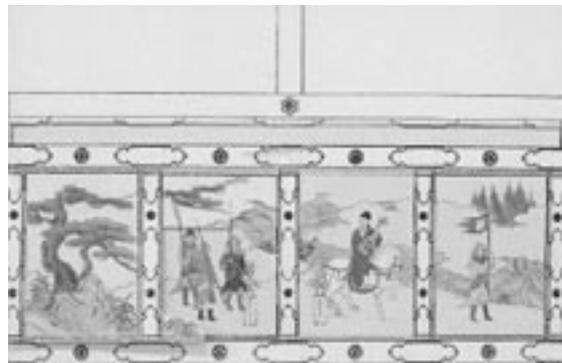
建具である障壁画は建物に付随しているので炎上の際には運命をともしることが多い。そのため遺されて伝わるものはどうしても少なくなる。小御所の障壁画もわずかに焼失を免れた襖絵があるが、大半は再建時に描き改められている。近世だけを見ても天正度（1590）から安政度までの間、9回も造営がなされ、そのうち6回が焼失後の再建だった。造営に際しては時代によって若干の差はあるものの、基本的には旧来の姿に復元しようとしている。それには古い図面や記録が必要となり、障壁画に関しては小下絵が重宝されたであろう。

平成13年冬のある日、京都御所で宝物調査の折、原形を縮めて描写した縮図類を寓目した。巻物仕立てになっていて御所の名付けた名称にしたがうと、御常御殿、皇后御常御殿、大宮御所、御学問所、御涼所、御三間・御献間、御花御殿、迎春・聴雪などの障壁画が23巻に縮写されている。これらは二種類に分けられ、御常御殿、皇后御常御殿のそれは小下絵、他は明治37～39年（1904～06）の間に縮写（模写）されたものである。今尾景年に学んだ梅村景山、幸野樗嶺の長子で菊池芳文門下の森本東閣、谷口香嶠門下の岐美竹涯、それに小澤文隆、北河原岸勝などによって描かれている。現代ならば写真がその役を果たすことになるだろうが、時として写真より手描きの図版の方がわかりやすいように、細部にいたるまで丁寧で明快だ。こうした縮図こそ本画が失せた時に貴重視される。

江戸城障壁画の小下絵が発見され、公開されたのは昭和63年（1988）だった。天保度（1839）の西の丸御殿、弘化度（1845）の本丸御殿再建に際し、狩野晴川院養信が中心になって障壁画が制作された。その折の小下絵、それも大方が伺下絵であり、両御殿の絵様が明らかになったのである。再建は焼失前の姿通りに、という基本方針であったから、伺下絵が幕末期のものとはいえ、万治度（1659）の探幽を中心に制作された絵様が踏襲されている。元禄14年（1701）浅野内匠頭長矩が

吉良上野介義央に斬りかかった刃傷事件でよく知られる松の廊下、映画や芝居での記憶にある巨大な松などどこにもない、真実は千鳥の乱舞するそれはやさしい浜松だった。

松の廊下の伺下絵を描いた狩野探淵の筆致はまことに柔らかい。画家のそなえもつ雰囲気伝わってきて、模写による縮図とは違った薄味のよさがある。御所の御常御殿、皇后御常御殿の小下絵も伺下絵と目され、土佐光清、狩野永岳、鶴沢探真、座田重就、原在照、岸岱、円山応立、吉田元鎮などをはじめ大勢の画家たちによる献立が並んでいて味わい深い。



熊本城本丸御殿「昭君の間」小下絵（部分）

いま平成の小下絵制作が進められている。熊本城本丸御殿障壁画の小下絵である。熊本城は明治10年（1877）西南戦争の時に焼失、天守閣はすでに復元されているが、三年後の築城400年を目差して本丸御殿復元のまっ最中である。建物に比べて障壁画の資料は乏しく、各部屋の画題と筆者名、格天井画のラフなスケッチが一枚伝わるのみで、復元のためのよりどころはほとんどないに等しい。この困難な復元の小下絵づくりに挑んでいるのが、本学でも教鞭をとって下さっている荒木かおりさん率いる川面美術研究所の方々である。

復元は可能なかぎり原画に近づけなければならない。熊本城の場合、その原画をイメージするのは400年近くタイムスリップするしかない。施主の加藤清正や画家の狩野言信になりきったつもりで想像をふくらませてみる創造的復元なのである。苦心の小下絵をもとにした絵様の検討が重ねられ、大下絵を経て、完成画が披露される日もそう遠くない。

京教今昔物語

個性豊かな先輩の先生方に 学びました

附属桃山小学校 浜崎 順子
教諭



私が本校に転任してきたのは、昭和48年の4月ですから、もう30年が過ぎました。しかし、私には昨日のこのように思えます。ただ、現実には、その頃のすばらしい先生方の何人かは、亡くなられてしまいました。

てしまいました。

学校の建物の様子は、ずいぶんとかわりました。

写真は、テニスをしているところです。その頃は放課後や夏休みや春休みにみんな集まってよくテニスをしました。仕事を離れてほっとしながら次へのエネルギーづくりになったものです。また、先生方と本音で仲良くなれる場でもありました。今はする間もなくなったのでしょうか。

テニスをしている後ろの場所もいつもテニスができるテニスコートです。今は、体育館になっています。

木の生い茂っている後ろの建物は、昔の養護学校です。私が来た時はもう今の養護学校の場所に移っていました。その頃は、各教科の研究室になっていました。体育教科部会はこの部屋でやったものです。ずいぶん古い著書もありました。少々おぼけやしきっぽい感じでしたので、子どもたちにとっては、この高台校舎（学校での名称です）のまわり



写真

は魅力いっぱいの遊び場でした。虫はいるし、いろいろな雑草が生えていました。“生活”のふさわしい学習の場だったかもしれません。かくれんぼの時は、隠れる所がいっぱいありました。そうそう縁の下にも入れました。

写真は、体育の授業風景です。ジャングルジムの後ろが、昔の体育館です。今は下が駐車場で上がプールになっています。写真は、体育館での体育の授業風景です。指導しているのは、私です。カードを準備して板書しながら指導しています。今の体育の授業とは違って、“正しく豊かな体育学習”の時代です。現在は、“楽しい体育学習”というテーマですから、子どもたちが自発的にやる体育学習をめざしてします。その指導は「見えない指導」が多くなっています。写真は、同じく昔の体育館で、土曜日の放課後にダンスの好きな小学校や中学校、



写真



写真



赴任して4年後

高等学校の先生方が集まってジャズダンスを練習しているところです。今、土曜日がなくなったせいか、その会も消滅してしまいました。さみしいかぎりです。

以上は、学校の外見ですが、中身もすばらしかったです。附属には、各教科のオーソリティがおられました。私は、27才の若輩でしたので、目から鱗がおちるような授業を見ました。社会、音楽、国語、読書教育、理科など、今でも立派に通用する授業でした。このような授業ができる先生は、現在おられるだろうかと思えるほどです。それで、勉強しないと損するという思いで、ノートをもっては授業を見せてもらいに行きました。先輩たちから学んで、今日の私があると思っています。今、総合学習で求められている、自分の課題をもったの長い追求学習は、理科教育や社会科教育や国語科教育でなされていました。問題を見つけ、解決に向かって子どもたちがそれぞれ追求していく学習は、本物であり深いものでした。音楽の鑑賞教育も子どもたちそれぞれが課題をもって深く味わい楽しむ学習でした。読書教育も熱心で、各学年の廊下に集団読書ができるように45冊ずつぐらいの本がありました。物語もあつたし科学的な読み物もありました。

低学年であれば、みんな1冊ずつもって読み聞かせてもらったり、集団で読むところがあったり、ひ

とりが読んだりしました。その後、読みを深めるための話し合いがありました。

高学年であれば、1週間くらいかけてお家で読んで、そのおもしろさを出し合い、読みを深めるのです。とつてもぶあつい本もありましたが子どもたちは読んでいました。

今はブレイルームや図書室にありますが、集団読書をする時間がとれていないのが現状です。

休み時間や放課後は、コーナーに集まって、子どもの話をしていました。この子どもの話が生きた勉強でした。子どもの見方やその指導の話がいっぱい出てくるのです。知らない間に時間がたって、保育園に子どもを迎えにいかねばならない自分が悲しくなったものです。自分の子どもに申し訳なかったですが。

本当に魅力ある楽しい毎日でした。

いつの間にか、30年という月日が経ってしまいました。公立校にもどろうと真剣に考えた時期も何度かありました。しかし、私にとって附属は、“自分らしく生きる”ことのできる学校でした。また、認め合い、高め合える学校でもありました。ここで仕事をするということは、自分が成長できる場所だったのでした。

これからも附属小学校が、自分らしく生きることができ、教師として人間として成長できる学校であり続けることを願っています。



写真



孫とわたし

待つのが得意なイギリス人

教育学科
教授

村上 登司文

文部科学省の在外研究員として、昨年の10月末から今年の8月末まで10ヶ月間イギリスに滞在しました。私が暮らしたリーズ市は、小説『嵐が丘』の舞台であるウェスト・ヨークシャー地方にあり、郊外は羊を放牧する牧場が広がり、所々にムーアの荒地が広がる自然を残します。私が住んだ通りは、リーズ市街地のはずれの小高い丘の上にあり、バスの停留所の終点近くに 있습니다。冬は強い風が吹き、耳当て帽子を買って寒く厳しい冬を過ごしました。しかし、3月になるとクロッカスや水仙が咲き始め、バラやアジサイなど月ごとに違う花が咲き乱れ、目を充分に楽しませてくれました。5月頃は近所の桜や、キャンパス内の一本だけあるしだれ桜が満開となり、日本を恋しく懐かしく思いました。8月には『嵐が丘』で有名なムーアをヒースが紫の花を一面に咲かせ、ある昼下がりその紫に染まるムーアをイタリア車に乗ってビューティフリーに疾走しました。実はレンタカーのノロノロ安全運転。

イギリスでは車を所有せず、公共のバス、電車を使ったので、通勤や買い物で人々を観察する機会が多くありました。リーズの街中は、実に世界中のあらゆる人々が集まっています。言ってみれば、毎日がオリンピック、国連会議場、万国博覧会といった様子で、白人が最も多いとはいいいながらも、見た目だけで、アフリカ系黒人、インド系、イスラ



『嵐が丘』舞台のムーアの眺め

ム教徒、ユダヤ人、中国人などの区別が付き、白人についても話を聞くと、イングランド人、アイルランド人、スコットランド人とイギリス国内でも出身が異なり、ヨーロッパから来たのであればギリシャ人、イタリア人、東欧からの移民や避難民など実に多種多様で、リーズ市の人々は人種・宗教・民族が入り交じった人間集団です。イギリスの多文化社会は、たくさんの植民地を持った大英帝国の歴史と、交通手段の発達による人々の国際化がなした結果です。日本に帰り着いて伏見の街を歩いた時の第一印象は、みんなが黒い頭の東洋人で、背が低い、同じような顔立ちの人ばかりだという「違和感」でしたが、帰国後2週間たった今はそれに慣れてきました。

イギリスの電車はしばしば遅れますので、電車の時刻板には日本と異なり、定刻（due time）と、予定時刻（expected time）の二つの表示があります。時間通りだと予定時刻の欄にon timeが表示され、20分遅れだと20 minutes delayの表示が出ます。また、同じ行き先の電車のホームがいつも同じではなく時々変わりますので、放送や案内ディスプレイに注意しないといけません。電車が着く直前に到着ホームが変更されて、多数の乗客が別のホームに急ぐことが多いです。私はリーズからブラッドフォードまで通勤しましたが、到着ホームが変わり、また私がボーとしているので3回ほど乗る電車を間違えました。

イギリスの旅行ガイドブックにも載っているのが、イギリス名物の行列（キュー）です。銀行、郵便局、トイレ、お店のレジ、バスを待つ時、車道の交差点、あらゆる所でイギリス人は上手に行列を作りよく順番を守ります。公共機関に問い合わせの電話をする時にも、係の電話応対を待つための順番待ちができます。

私が帰国する前にBT（日本のNTTに当たる）に電話を解約した時の話です。音声案内に従って何回か番号をおしてしばらく待ちました。最初の女

性に、来週引っ越すので電話を止めたいことを告げます。保留のメロディーを聞きながら待ちます。電話をして約30分が過ぎ別の女性が出て、何のご用件かと聞かれ、電話を解約したいことを告げ、名前、住所、電話口座（アカウント）、希望する解約日時を伝えます。保留状態となり、約15分過ぎて、先の女性が出て、日本の住所を教えます。「このまま待てますか」と聞かれ、約10分待ちます。

女性が再び電話に出て、手続きが終了したことを告げられました。電話を解約するだけで約55分も待たされました。フリーダイヤルとはいえ、イギリスに住む人は気を長く持つ必要があります。ただし、待つのに慣れたイギリスでは、車のクラクションをほとんど聞きませんでした。

中学2年生の娘はバスで10分ほどのところにある公立のハイスクール（9年制）に配属されました。英語を全く話せないので、学校に適應できるかと随分心配しましたが、友達もでき、一人でバス通学をしながら意外と元気に通いました。イギリスのハイスクールは日本の中学校と異なっている点があるようです。色んな子ども達があり、白人の子や、スカーフを巻いたイスラム教の子や、インド系の子や、中国人の子がいます。日本人は他に一家族からの二人しか在籍していません。昼休み（昼食時間）が午後1時10分からと遅いため、休み時間に家から持ってきたものや校内で買ったものを食べてもよく、生徒はお菓子を食べています。学校にはカフェテリアがあり、サンドイッチやピザなどを売っています。休み時間には校舎に鍵をかけるため、生徒はどんなに寒くても校舎外に出させられました。雪の日はさすがに強制されなかったのですが、冬の間に出されるのは辛かったです。教科書は学校に備え付けで、それぞれの授業が始まる時に配られます。ノートは自分で買わなくてよく、使い切ったら先生にもらいます。日本にない授業として、演劇、宗教教育、フランス語などがあります。年度末の7月に、1年間の成績結果をもらいました。各担当の教師からの数行のコメントが付いており、また各教科で評価点ごとの人数が記入されている一覧表をもらいます。成績表は、ナショナル・カリキュラムに従った到達状況を示した絶対評価であると同時に、学年の中での位置がわかる相対評価になっています。彼女の学校での一番の友達は、インド大陸出身3世の回教徒とシーク教徒の二人の女生徒でした。

私は日本食派なので滞英中に体重を減らしました



平和研究学部のシンボル「和解」の像

が、研究成果は上がりました。最後に私の研究について触れます。私が研究で滞在したブラッドフォード大学平和研究学部は、世界的に大きな平和研究センターで、イギリスにおいて平和学を専攻できる唯一の大学です。教授スタッフは20数名おり、世界40ヶ国以上から400名以上の学生・大学院生が研究しています。私の研究テーマは「21世紀の平和教育の方向性についての研究」です。日本の平和教育は、戦時下における日本国民の戦争体験を継承することが中心でしたので、欧米で戦争についてどのように教えているかを研究しました。欧米では平和教育の内容に環境、開発、共生、ジェンダーなどの多様な問題を視野に入れた「包括的平和教育」の概念で広い意味の平和教育が実践されています。これからの平和教育には次のような課題があるといえます。

平和教育の中に、今後は地球市民教育、「持続可能な発展」のための教育、未来の教育、紛争場面における非暴力的紛争解決能力の学習などを、視野に入れる必要があります。テロと報復攻撃の連鎖が止まらない世界情勢の中で、過去の戦争被害を伝える日本の反戦平和教育を世界に発信することが、日本の重要な役割です。平和教育実践の際に、学校教師は教育方法と教材のバランスに注意し、平和に関する時事問題の扱い方を身につける必要があります。戦争についての教育においては、交戦した両者の立場を視野に入れた双方向の視点から、戦争加害の問題を振り返り歴史認識を深めなくてはなりません。こうした課題を解決することがこれからの平和教育の方向性といえます。

イギリスの研究生活で見聞したことをいくつか書き記しました。本学が国立大学法人になる過渡期にかかわらず、10ヶ月間外国で研究する機会を与えていただいたことを心より感謝申し上げます。

京教学内探訪

Meet the World

附属教育実践
総合センター

大森 美香

本学には、約60人の留学生が学んでいます。主な出身国は、中国、韓国、台湾、タイといったアジア諸国が中心ですが、アルゼンチン、コロンビア、ペルー、ブラジルのような中南米、ロシア、フランス、バングラデシュ、インドからと、少数ながら世界の各大陸からの留学生および外国人研究者の方々が集まっています。今回は、留学生、日本人学生、地域の方々の交流の場所としての、「留学生交流演習室・地域交流演習室」の紹介をしたいと思います。

教育実践総合センター1階に「留学生交流演習室・地域交流演習室」が設置され、丸2年が過ぎました。この施設は、平成13年の留学生特別経費により設置が可能となったものです。本学の留学生、日本人学生、地域の方々がお互いに交流することにより、相互理解を深め、異国に暮らす留学生の日常的な支援の場所を提供することを目的としています。平日9時～5時のオープン利用の時間帯には、誰でも自由に出入りすることができます。演習室には、PC、プリンター、外国語の辞書、プラズマテレビ、各国映画のDVDソフト、日本紹介のための書籍やビデオが設置されており、また文部科学省によるエルネットを視聴することもできます。

2002年から、留学生自身がコーディネーターとなって「留学生と地域の交流プログラム」を開催してきました。留学生の多彩なバックグラウンドを反映して、さまざまなプログラムが展開されてきました。これまでのプログラムの一部を紹介してみたいと思います。

平成14年度

「世界の人々と囲碁を楽しもう！」

(囲碁を楽しもう！ PART)

「世界の人々と囲碁を楽しもう！」

(囲碁 PART)

ゲスト講師：日本囲碁ソフト社長・越田常正氏



「ブラジル映画オルフェ」

「餅つき大会と日本の正月あそび」 / エル・ネット
ト「日本の国際化と日本語教育(1)」

平成15年度

「魅惑の国コロンビア」

スピーカー：教員研修留学生

リリベス・ベレス・リベラ

韓国映画・タイ映画 上映

「ブラウンバッグ・ミーティング カオス理論：
私の数学リサーチ in 京都」

スピーカー：京都大学訪問研究員

エリックベッドフォード氏



幼児教育学科の学生さんによる季節に応じたディスプレイ



留学生と地域の交流プログラム

「餅つき大会と日本の正月あそび」
「囲碁教室」

外部からのゲストの方々や参加者同士で、くつろいだ雰囲気での交流がすすめられています。

通常のオープン利用の時間帯には、多くの留学生、日本人学生、海外からの教員研修生の方々が集まり、各自の学習や研修をしながら交流を楽しんでいます。昼休みには、各自持ち寄ったお弁当を材料に国際交流がすすめられています。インドからの留学生プリーティさんが、この記事のために「留学生交流演習室・地域交流演習室」を使って初めての感想を書いてくれましたので以下に紹介してみましょう。

京都教育大学には留学生が多く、日本人の学生たちに混じって行動しているので、特別な存在には見えません。留学生たちと日本人が仲よくするためのいろんな工夫がされていて、その一つとして「留学生交流演習室・地域交流演習室」があると思います。略するのが好きな日本人はどうしてそんな長い名前をつけたと聞いたとき、この演習室は留学生同士、留学生と地域の人々との交流を目的にしてい

る、という答えをもらって本当の交流を狙っているのだと感じました。

私はここに「交流」という言葉を使っているが、この「地域交流演習室」で一緒に昼ご飯することでも交流になっていると思う。お昼になるとお弁当持って来た留学生たちが自由にこの演習室に来て昼ご飯します。例えばいろんな国の食べ物を食べられるのはもちろん、その食べ物の作り方、自分の国でもこんな料理はあるかどうかを考えて意見の交換するという形で、自然な国際交流になっています。また、誰かがインターネットを使って自分の国の音楽を聞いていると、それについて教えてもらったり、その国の現在の事情を教えてもらったりして、自分の国と比べても勉強にもなると思う。

もう一つとてもいいイベントが映画会です。いろんな国の映画を見るのはもちろん楽しいですが、その国の出身者による説明があり、映画だけではわからない文化と社会の背景がはっきりと分かります。

本当の交流だと思いませんか？

<日本語日本文化研修生

マンチャング・プリーティ>



附属学校園だより

自然って不思議！

- コンテナビオトープの取り組み -

附属桃山小学校
副校長

川端 建治



本校では、平成12年度から、大学の広木正紀先生のご指導を受けながら、中学年を対象に「コンテナビオトープ」を学習材として、総合的な学習に活かす取り組みを続けている。学校ビオトープとしては、池づくりに取り組む学校が多いが、本校のビオトープは、縦横30cm・深さ20cmぐらいのプラスチックコンテナにいろいろな場所の土を入れたり、池や川や水道の水や雨水等を入れたりして、外に放置しておくだけのものである。

これを中庭に置きっぱなしにしておき、何も手をかけずにみんなで、コンテナ内の様子の変化を長期間に渡って観察していく。これが、コンテナビオトープを使った自然学習である。

手間をかけずに簡単な装置を使った取り組みであるが、やがてコンテナ内には、さまざまな変化が起こり始める。草や花が芽生えてきたり、水の中にはどこからか飛んできたトンボが産み落としたりした卵がヤゴに孵ったりするのである。

コンテナが中庭に置かれているために、観察をする子の楽しそうな様子を、全校の子どもたちが毎朝目にする事になり、ビオトープに関する情報も、子ど

もたちの間で日常的に飛び交う状態になっている。今年も、新学期が始まって1ヶ月ぐらいたった頃から、「先生、いつからコンテナ始めるの?」「ぼくらの容れ物はちゃんとあるの?」「早くやろう。」等と、3年生の子どもたちから意欲に満ちた声が出始めた。これは、この子どもたちも、低学年の頃から興味を持ってこのコンテナビオトープに関心を寄せていたことの現れである。

まず、「コンテナの中にどんな土や水を入れるか?」「その土や水は、誰がどこから持ってくるか?」等、子どもたちが、自分たちで話し合う。4人1組で、一つの条件のコンテナを担当し、土や水の準備からコンテナの設置まで、すべて自分たちで行うのである。翌日から、登校した子は、すぐに中庭にかけつけ、観察を始める。

この取り組みを通して、子どもたちは、ありのままの自然の存在やその営みに気づくようになる。そして、その不思議さに目を離せなくなった子どもは、観察を続けるうちに、自然を身近なものに感じるようになっていく。

私たちは、このような取り組みが、やがては、自分たちの生活の基盤が自然にあるという認識の育成につながっていくと考えている。



久美浜小天橋 最後の臨海学舎

附属京都小学校
副校長

多田 光利



磯での水泳学習風景

昭和18年に一時閉じられた臨海学舎が、昭和26年の7月に福井県高浜において復活しました。以降途絶えることなく夏休みを利用して7月20日過ぎから出かけていました。実施場所も高浜から福井県気比、京都府舞鶴、そして、京都府京丹後市久美浜小天橋へと変わりながらも続いてきました。

3泊4日で実施している時は、3日目の午後から海での水泳練習の総仕上げとして個々の泳力に応じて、大遠泳、中遠泳、小遠泳というプログラムもありました。また、4年生は磯浜での観察でしたが、

5年生は2度目の臨海学舎でもあるので、磯での水泳を実施していました。さらに、10年以上前に遡るのですが、臨海学舎2日目の夕刻から20台ほどの貸しボートを使い、久美浜の海でボート練習をするというプログラムもありました。

実施場所、参加学年、宿泊日数において様々な変遷がありましたが、一貫して日本海で実施していた臨海学舎も、残念ながら本年度を最後に日本海とは別れを告げ、来年度からは瀬戸内の海での臨海学舎を実施することになりました。



久美浜の海でのボート練習

3 回目の「湖畔学習」と最後の「修学旅行」

附属桃山中学校 副校長 多羅間 拓也



本校では、各学年毎に宿泊をともなう行事を実施しています。1年生では、滋賀県近江八幡での「湖畔学習」、2年生では、長野県八方尾根での「スキー教室」、3年生では、山口県秋吉台を中心にした「修学旅行」を実施してきました。ここでは、1学期に実施した「湖畔学習」と「修学旅行」について報告をいたします。

1年生の、琵琶湖畔（近江八幡市宮ヶ浜）での「湖畔学習」は、以前、滋賀県朽木村で実施していた「サマーキャンプ」の続きで、今年で3回目になります。「サマーキャンプ」で利用していたキャンプ場が、学校単位での使用が出来なくなったため、1年生の宿泊行事を「湖畔学習」としてリニューアルし、今年で3年目になったというわけです。「湖畔学習」の主な活動内容は、手作り筏によるレース、クリーンキャンペーン（湖畔の清掃活動）、室内レクリエーション、琵琶湖博物館での環境学習などです。中でも、生徒が最も楽しく活動するのが、現



地インストラクターの指導による、筏づくりとそれに乗っての競争で、湖畔が大きな歓声に包まれます。また、琵琶湖博物館での環境学習は、1年生の総合的な学習（preMET）のプログラムに組み込まれていて、事前学習や調査から、現地の学習、事後の報告書（新聞形式のレポート）作成までを班単位でおこないます。

3年生の、山口県秋吉台を中心にした「修学旅行」は、長い伝統を持つ行事で、フィールド学習による修学旅行の先駆けとして、何度もメディアに取り上げられたりもしました。しかし、その学習を支えていただいていた現地博物館の規模縮小や、新たな体験活動展開への希望などもあり、今年度の修学旅行を最後に、来年度から旅行先を沖縄に変更することにしました。従来での広島での平和学習を充実させ、さらに、沖縄独特の気候風土や文化などを活かして、生徒により豊かな体験活動をしてもらいたいと考えています。

授業日数や授業時間の減少などにより、学校行事は精選を求められています。また、「総合的な学習」導入による体験活動の増加にともない、学校行事に質的転換が必要とされています。実施に大変な労力を要しますが、宿泊をともなう旅行的行事の意義は多くが認めるところで、全国的に附属学校の特色ともなっています。生徒や学校をとりまく状況の変化に対応しつつも、伝統を活かしながら、魅力ある学校行事を今後も作り上げていきたいと考えています。



京都府合唱コンクールで金賞

附属京都中学校
副校長 橋本 雅子

本校では、選択教科の時間を中学2年・3年の異学年合同で表現領域（合唱・リコーダーアンサンブル・美術表現・ダンス・ボディ・ミュージカル・ものづくり・琴・書）から選択する時間と（サイエンス・ランゲージ）領域から選択する時間の2つがあります。前者の表現領域からの選択は、生涯学習につながる趣味的な要素も含まれており、生徒が試みたい講座から週2時間、年間70時間を履修することになります。



平成16年度 京都府合唱コンクール（中学校・高等学校の部）
2004年8月29日 京都こども文化会館

今回は、その中で「合唱」を取り上げて紹介をしたいと思います。講座のねらいは、一人一人が響きのある声で、しっかりと確実に歌えることを目標に、必修の音楽の時間より高いレベルの合唱を目指しています。発表の目標としては、NHK全国学校音楽コンクール・京都府合唱コンクール・本校学習発表会などです。

前半の練習は、腹筋運動と腹式呼吸・体の力を抜くこんにやく体操など基本的な姿勢をつくることと、発声練習を重点に行いました。一人一人が鏡を使って共鳴腔が開いているか、口がしっかり開いているか、明るい表情で歌えているかなどを確認しながらハーモニーを重ねる練習を繰り返し、響きのある声づくりに真剣に取り組みました。後半ではパート練習に入り、一人ずつできていないところを指摘し合ったり、違うパートの歌を聴いて評価し合う中から少しずつパートの統一感が感じられるようになってきました。

そして、8月24日（火）長岡京記念文化会館でNHK全国学校音楽コンクール、8月29日（日）京都こども文化会館エンゼルハウスで京都府合唱コンクールが開催され、NHK全国学校音楽コンクールで銅賞、京都府合唱コンクールで「金賞」を受賞しました。

本番の演奏では、詩の心を伝えようとする一人一人の思いが響きのあるハーモニーとなって、最後の「この夢をつなぎあわせよう」というフレーズを歌い上げることができていたと思います。

【生徒の感想より】

私たち「選択合唱」の夏は、合唱で始まり、合唱で幕を閉じた。今回NHK主催と京都府主催の二つのコンクールに出場した。NHK本番。結果は、銅賞。よく考えればすばらしい賞なのにみんなの表情は暗かった。その後、悔しい思いを果たそうと細かいところまでハーモニーを創り上げ、念願の金賞と、関西大会出場の切符を手にした。この結果までの道のりは、とても遠かった。賞に対する気持ちの個人差が目に見えた。それでも、気持ちを一つにして頑張った。

私たちは、このコンクールを通じて様々なことを学んだ。時間は、上達には比例しない。どれだけの時間練習したかではなく、どれだけの時間集中して一つの目標を達成する努力をしたかだと私は思う。これは合唱だけでなく、すべてのことにつながると思う。私たち選択合唱は、また新たな目標に向かって頑張ります。

サマープログラム

附属幼稚園
副園長

川端 智江

新しい取り組みとして7月21～23日の三日間、教育課程外の保育を企画しました。「夏の真っ盛りです。幼児教育を学んでいる教育大学の学生を遊びのリーダーとして迎え、子ども達と木陰で水や砂を使って半日ゆったり遊び、ワクワク、ドキドキ、いっぱい楽しみたいと思います」と参加者を募集しました。申込者多数につき調整し、99名が「2004 Summer Program In Fuyo」のロゴ入り麦わら帽子をかぶり、サマープログラムを楽しみました。いつもとは違った雰囲気になるようにテントを立てたり、旗や風船を飾ったり、学生をリーダーにして、3、4、5歳児混合の5～6名のグループで遊ぶなど、いろいろ工夫しました。グループ毎に顔をつきあ



わせて旗を作り、裸足で池や川を作ったり、イチヨウの木陰で泥団子作りをしたり、テントの中で集めたセミを放し飼いにしたり、おやつを食べながらおしゃべりをしたり…。園で見かける顔だけれど、一緒に遊ぶのは初めて。どんな子かな？ ちょっとよそよそしかった子どもたちも、すっかりうち解けていきました。初めて出会う学生や異年齢児と交わり、気の向くままに自然を使った遊びに没頭する中で、担任が普通の保育では見せない子どもの姿に気づいたり、学生からは「9月からの実習にこの経験を生かしたい」などと、子ども、教師、学生にとって有意義な半日になりました。



マレーシア研修旅行

附属高等学校 副校長 斉藤 正治



入学以来、SARSや鳥インフルエンザ事件、刻々と変化する海外情勢など諸般の社会情勢に翻弄され、安全が確保されるかどうかを悩ませながら、本校にとって初めて訪れたマレーシア研修旅行の5日間を紹介します。

7月24日から28日まで、2年生全員が参加した旅行初日、7時30分に京都駅をバスで出発。関西国際空港を午後1時に出発し、6時間後にクアラル

ンプール（KL）国際空港に到着。マレーシア料理の慣れない香辛料に戸惑いながら夕食を郊外のレストランで終え、ホテルへ向かう途中で飲料水をコンビニで購入。

2日目、事前に計画した行動表に基づいて、10人グループでKL市内研修。日韓の建設会社が分担して建設したアジアー高いツインタワー、にぎやかなブキピタン、ジェットコースターが館内を走る





巨大ショッピングセンターのタイムズスクエア、イスラム教モスクなど、現地大学生ガイドと交流しながら暑いとはいえ京都より涼しいKL市内を歩いたり、時刻表がないモノレールで移動し、チェックポイントで先生と顔をあわせて20班全てが無事にホテルへ到着。

3日目、コース別研修の日。マラ工科大学では午前中、大学教授をはじめとしたインストラクターのもとに120名が3コースに分かれます。作成した布が9月に届くのが楽しみなパティックコース、広大な大学構内のジャングルを2時間弱歩いたジャングルトレッキングコース、日本でほとんど知られていないスポーツのローンボウルコース。午後はコース全員が279段の石段上にある洞窟内の寺院バトゥーケイブなどを見学してホテルへ。アプバカラ高校では午前中は両校の学校長の挨拶に続いて本校からはギターの伴奏で「涙そうそう」などの合唱を披露、相手高は演舞や日本の歌合唱、3つの民族（マレー系、インド系、中国系）の民族衣装の披露など学校をあげて盛大に歓迎していただき、本高生80名はたいへん感激。その後グループに分かれてゲームなどをして交流を深め、食べきれないほどの民族料理などで仲よく昼食。午後は高校に残ってサッカーの国際試合？などをするグループ、交流した高校生の家庭に夕方まで2人組でホームビジットする11名、翌日まで2人組でホームステイをする45名、英語が通じる現地ですが生活習慣の違いに戸惑いながらも買い物に連れて行っていただいたり、ご馳走になったり大変な歓迎を受けたとか。

4日目、マレーシアの古都マラッカ研修。樹液を触ったゴム園、F・ザビエルの埋葬された寺院などをガイドの解説を聞きながら見学、植民地時代の面

影残すオランダ広場やチャイナタウン散策・民芸品ショッピング、などのメニューをバス毎に順序をずらして消化。ホームステイしていた生徒のバスも合流してマレーシア最後の夕食を摂り、KL国際空港を午後11時出発。翌早朝7:00関西国際空港へ到着し、バスで高校へ戻り全員無事に解散式を終えることができました。

本校では総合的な学習のひとつとして、本研修旅行には異文化理解がその課題として与えられています。それに対して、できるだけ人との交流を通してアプローチしようと、同世代の現地高校生や大学生、そして家庭で現地の人との交流などをプログラムに盛り込みました。複数の民族、宗教から構成されるマレーシアが生徒の目にどのように写り、異文化理解がどのようにすすんだのか、英語は通じたのかなど今後の生徒のレポートや事後学習を待たないと十分な評価できません。ただ、文化や風俗・習慣の違いに対して違和感をもつだけに終わらず、興味を抱いたり、違和感を持ちつつも違いを楽しんだり、そして理解し尊重できるようなかかわり方を形成するには、貴重な経験となったことでしょう。



大学・美術科との合同プロジェクト 『野焼き』

附属養護学校 副校長 小竹 健一

今年の夏の暑さは格別でしたが、この夏休みに本校高等部生徒と大学美術科と美術科大学生との合同プロジェクト「野焼き」がありました。この合同プロジェクトに対する本校生徒、保護者の期待は私たちの想像をはるかに上回り、4回のシリーズの創作活動は生徒と保護者又は家族ぐるみでの参加もあり、大いに賑わいました。

これまで、本校生徒は大学グラウンドを使用しての記録会や大学プール、生協食堂での職場体験実習など大学施設等を活用した種々の取り組みを実施しています。特に、高等部生徒は大学（ギャラリーあなぐら）で催される展覧会の鑑賞や自分たちの作品の発表展示、大学美術科の先生、大学生とのギャラリートークなどを通して大学そのものや大学・美術科の先生方や学生さんにあこがれや親しみを感じています。そこで、今回は、これまでの合同での取り組みをさらに進展させようとの考えで、大学美術科と合同で陶芸の制作（野焼き）から合同展覧会までをやろうということになりました。



以下の表が「野焼き」の主な日程です。

回	実施日	時間	活動内容
1	7月28日(水)	10:00 ~ 14:30	いろいろな種類の土を使って粘土を作る。
2	8月7日(土)	10:00 ~ 15:00	大学生と一緒に制作する。
3	8月27日(金)	9:00 ~ 16:00	枯草や木材を燃やして野焼きをする。
4	8月28日(土)	10:00 ~ 12:00	窯から作品を取り出す。

このような大学生が、教育実習以外の機会に附属学校生徒に「技術指導する」「一緒に余暇活動を楽しむ」などの実践は、大学生の研究活動、ひいては将来教員を目指す大学生の経験として大変有効と思われます。また、大学生が養護学校生徒を迎え入れることは、大学生本人がものづくりをする上で明確な動機付けになることでしょう。大学・附属の連携が問われていますが、今回の取り組みはその具体提案として非常に興味深く、学生教育面で附属学校を有効活用した一つの試行モデルとして高く評価できると思われます。

野焼きプロジェクトの最後に、今回活動の評価の一環として10月に大学講堂(?)で展覧会が計画されています。本校生徒と一緒に制作した大学生の作品も同時に展示し、合評会も行われるそうです。お時間がありましたら、是非足を運んでみて下さい。



非常勤講師から

和楽器に触れて

音楽科
非常勤講師

林 美恵子

和楽器授業を通して文化人類学、あるいは民俗音楽学の一部としての日本音楽ではなく、一つの芸術音楽としての理解のために、基礎技術や合奏法を習得し、これらの実技により日本音楽の旋律、および音階の特徴を、習得頂く事を目的とした楽しい授業を進めております。

まず、一番大切な願いを、授業開始日にお伝えしています。音色を感じる心で、この時間を過ごしたいこと。受講生の皆さんの目が、耳が、音に敏感に反応出来ること。豊かな環境と、十分な集中力を持てる授業を目指しています。教える学びも、そこにはいつも音への探究心が生まれ、その中で日本音楽への理解が得られる事を望んでいます。

「勤を育てる」そんな事も授業の重要な目標にしています。絃のミスやテクニックミスは当然の事ながら、どの様な音を求められているかなど、音楽を

楽しむ為にも勤の良さが求められます。

最近、糸への『やさしさ』『思いやり』を口にしています。特に三味線音楽は、柳川三味線（京三味線）を使用しています。柳川三味線は極細三味線で、糸は三味線音楽の中でも一番細く、演奏者の気持ちを単純に音にします。楽器への想いも含め豊かな環境作りも、大切と感じます。

今日では学習指導要領に和楽器が導入され、音楽教育指導者の和楽器への理解を求められています。ここ教育大学におかれても、将来『音楽教育』に携わる方々が少しでも良い方向で日本音楽を理解し、また楽器に『触れる』といった大変な指導を求められている今、教育大学での『和楽器授業』がいかにな生徒たちに日本の音を共に楽しんで頂けるのか問われている授業である事を心得ねば、と考えています。

教育実践基礎演習を担当して思うこと

附属教育実践総合センター
非常勤講師

神月 紀輔

昨年の10月から、本学でお世話になっています。私自身は神戸市の中学校で数学教諭としての経験はありましたが、大学の教壇に立つのは本学が初めてでしたので、最初の講義の日は、おなかの調子が悪くなるほど非常に緊張したことを、JR藤森の駅にたつと、昨日のように思い出します。

教育学部はいいなぁと常々思っております。というのも、色々な専門を持った方が集まっているからです。日ごろ小さな世界でしか生活していない私にとっては、刺激的な時間が過ごせます。

私は、教育実践総合センターで「教育実践基礎演習」という演習の担当をさせていただいています。この演習は、教育実習前に模擬授業を行う演習ですが、学生さんたちの授業内容がとてもバラエティに富んでいて、私自身も勉強になります。幼児教

育、障害児教育の方から小中高での実習に赴く方まで様々な方が、よく時間をかけて教材や教具を準備し、精一杯の授業演習をしています。色々な専門の授業の一部を見ることも学生の皆さんにはプラスになると思います。

私も教育学部出身ですが、大学の頃、こんな演習はありませんでした。ですので、実習ではかなり苦労したことを思い出します。また、講義のときは数学科の友だちばかりで、講義や演習で他学科の方と議論したりすることは皆無でした。

大人になってから、「学生時代はああ過ごせばよかった」とか思うものですが、学生の皆さんには、今を大切に毎日過ごしていただきたいと思っています。

原稿募集！

皆さんからのご意見や投稿を広く募集いたします。とりわけ地域の皆さんや学生の皆さんからの投稿や企画等歓迎します。建設的なものであれば、紙面の許す限り掲載したいと思っておりますので、どんどん送って下さい。原稿等には締切期限を設けておりません。ただし、採用の可否は委員会で判断いたします。

【投稿要領】

身近なできごと、ちょっとした発見、楽しかったこと等、テーマは自由です。

(テーマ例：研究室紹介・旅行記・趣味・体験談・提言等)

写真・イラストも募集します。タイトルまたは説明文を付けて下さい。

送付先

タイトル、氏名、連絡先を明記の上、下記へお送り下さい。電子メールでも構いません。

〒612-8522

京都市伏見区深草藤森町1番地

京都教育大学総務課気付「地域連携・広報委員会」

E-mail: kouhou@kyokyo-u.ac.jp

第114号の読者の皆さまへ

kyokyo をお読みいただきありがとうございました。

読まれた記事のご感想や広報誌のあり方などのご意見を、お聞かせ下さいませんか？

あなたのご意見を、今後の企画・編集の参考にさせていただきたいと思っておりますので、上記の連絡先にお寄せ下さい。

114号編集後記

広報の114号をお届けします。表紙に力強い隷書の掛け軸を持ってきたので少し変わった印象をもたれたことでしょうか。これまでも表紙の絵は、附属校園の幼児・児童・生徒の皆さんの素敵な作品を借りてきましたが、今回もすばらしい作品を附属高等学校の中園千晶さんから提供していただきました。ありがとうございます。

さて、今回の特集では、大学のある伏見の町を舞台に展開してきた「伏見ふれあいフェスタ」を取り上げ、学生の実地教育として取り組んでいることをお知らせしています。地域の皆さんにも4月初旬に毎年この行事のあることを認知いただけたところまできたと思っています。その様子的一端を紹介した特集記事です。

研究余滴に寄稿いただいた脇坂先生はじめ記事をお寄せいただいた先生方、ありがとうございました。また、附属校園の紹介記事を毎号お願いしている副校長先生には改めて御礼申し上げます。ありがとうございます。今後ともよろしく願いいたします。

法人化後半年経ち、地域に根ざした教育大学としての発展が願いです。関連する記事の企画などアイデアをお寄せください。

地域連携・広報委員長 小寺 正一

地域連携・広報委員会

委員長	小寺 正一（理事・副学長）	
副委員長	谷口 淳一（美術科）	
委員	西 勇夫（附属学校部長、音楽科）	浅井 和行（附属教育実践総合センター）
	田中 里志（理学科）	石川 誠（社会学科）
	安江 勉（美術科）	荒木 光（附属環境教育実践センター）
事務担当	総務課	



京都教育大学広報 第114号

発行日
2004年10月29日

編集
地域連携・広報委員会

発行
京都教育大学
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1番地
電話 075-644-8106
<http://www.kyokyo-u.ac.jp>